2020 年度 室内楽オーディション合格者による

洗足学園音楽大学 大学院室内楽コンサート

2021 年 3 月 3 日 18:00 開演（17:30 開場）前田ホール

Program

1.ピアノ三重奏

N.カプースチン／
フルート、チェロとピアノのための三重奏曲 Op.86

Fl. 前原 希美
Vc. 橋本 総司
Pf. 門岡 明弥

2.ピアノ三重奏

P.I.チャイコフスキー／ピアノ三重奏曲 イ短調 作品 50
「偉大な芸術家の思い出に」より 第 1 楽章

Vn. 山口 亜純
Vc. 大友 美侑
Pf. 有賀 瞳

～休憩～

3.弦楽四重奏

C.ドビュッシー／
弦楽四重奏曲 ト短調 作品 10 より 第 1.3.4 楽章

Vn. 林 桃子
Vn. 北川 乃梨子
Va. 有福 佑依
Vc. 大友 美侑

4.オーボエ五重奏

A.バックス／オーボエ五重奏曲

Vn. 藤岡 瑞季
Vn. 有福 佑依
Va. 林 桃子
Vc. 橋本 総司
Ob. 三輪 桃子

Greeting

本日はご来場頂き、ありがとうございます。洗足学園音楽大学・大学院では「室内楽研究」をレッスン形式で行っております。年度末試験によって優秀グループを選抜しました。本日演奏する 4 つのチームは試験の評価上位に選抜された優秀な学生達であります。御来場のお客様には、今後楽壇に羽ばたく若人を温かい拍手で見守っていただきたいと思います。

洗足学園音楽大学・大学院教授 室内楽研究運営委員会委員長
渡部 亨

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

1.ピアノ三重奏

N.カプースチン／フルート、チェロとピアノのための三重奏曲 Op.86

Fl. 前原 希美(院 2)

Vc. 橋本 総司(賛助)

Pf. 門岡 明弥(院 2)

曲目解説

N.カプースチン(1937-2020)はウクライナ出身のコンポーザー・ピアニストである。作品のスタイルはクラシック音楽の体裁を保ちつつも、その形式の上にスウィングやビバップといったジャズの語法や、ラテンやロックのリズムなどを始めとした幅の広い音楽要素を融合し、華やかで独創的な曲を数多く生み出してきた。

《フルート、チェロとピアノのための三重奏曲 Op.86》は 3 楽章構成で書かれたピアノ・トリオで、現代特殊奏法やアドリブを用いていない伝統的記譜法によって生み出された。楽譜に記されたフレーズや和声・リズムは、どれも即興的であるように感じられるが、実際には 1 つ 1 つの音が緻密に計算されており、カプースチン自身が選び抜いた"洗練された音"であることも特徴的である。ジャズ音楽の魅力が存分に詰まっていながらも、決して即興ではない。「クラシックとジャズの融合」と表現されることの多いカプースチンの楽曲だが、今回演奏する曲も例に漏れず、同様のことが言えるだろう。第 1 楽章、アレグロ・モルト。ピアノとチェロによって生み出される重厚な和音に始まり、フルートが高音を口ずさむ。しばしの準備運動を終えた後に、ピアノによる超低音のジャズリズムが躍動。フルートは甲高い音で進み続け、チェロは時折ウォーキングベースになりすましながら、グルーヴに推進力を持たせる。まるでジャズセッションのような性格を持った本楽章は、強烈なフィニッシュによって曲を締めくくる。 第 2 楽章、アンダンテ。第 1 楽章によって生まれた熱を冷ますかのように、どこか夜を思わせる雰囲気を持った楽章。行き先が掴めない不安さを抱えつつも、フルートとチェロによる情熱的な掛け合いによって道が示されていく。 第 3 楽章、アレグロ・ジョコーソ。第 2 楽章で抑え込まれていたエネルギーが弾け出し、疾走感溢れるピアノによって場面が引っ張られる。所々で第 1・2 楽章の回想を交えつつ、ピアノの下降系アルペジオを合図に、より一層激しさを増していく。その勢いはさらに加速していき、クライマックスはピアノ、チェロ、フルートによるユニゾンで爽快に幕を閉じる。

門岡 明弥

2.ピアノ三重奏

P.I.チャイコフスキー／ピアノ三重奏曲 イ短調 作品 50 「偉大な芸術家の思い出に」より 第 1 楽章

Vn. 山口 亜純(院 2)

Vc. 大友 美侑(賛助)

Pf. 有賀 瞳(院 2)

曲目解説

ピアノ三重奏曲イ短調作品 50「偉大な芸術家の思い出に」は 2 楽章で構成されており、全体で約 50 分にもなる大作である。23 歳で法律家を辞めて音楽家になる道を決意したチャイコフスキーは、設立されたばかりのペテルブルク音楽院に入学する。そこでピアニスト兼作曲家として活躍するアントン・ルビンシテインに出会い、卒業後はすぐにモスクワに移って音楽協会で教佃をとることになった。また、そこで同時にアントンの弟であるニコライ・ルビンシテインが設立したばかりのモスクワ音楽院に講師として迎えられることになった。ニコライ・ルビンシテインは、音楽家として生計を立てるチャイコフスキーにとって良き上司、恩人であったと共に、長年彼のよき理解者で大親友だったが、1881 年 3 月にパリで腸結核により没した。このピアノ三重奏曲は、翌年にその死を悼んで書かれ、ルビンシテインの没後 1 周年に初演された。チャイコフスキー41 歳から 42 歳にかけての作品である。第 1 楽章はソナタ形式で書かれ、「悲しみ」と題されている。ピアノの暗く哀愁を帯びた旋律に、チェロが感傷的な悲しみの主題を提示して始まる。この曲は 2 楽章構成になっているが、第 2 楽章は「主題と変奏」と「最終変奏とコーダ」に分かれており、実質的には後者が終楽章の役割を果たしているといえる。この楽章中に出てくるロシア訛りのある旋律は、1873 年 5 月に劇付随音楽「雪娘」のマリインスキー劇場での上演成功後、チャイコフスキーとルビンシテインが音楽院の学生らと共に打ち上げを兼ねてモスクワ郊外にあるヴォロビエフの丘へ遊びに行った際、地元の農夫らも加わって踊り、歌った時の旋律であり、故人との想い出の象徴としてこの作品に引用したという。やがて愉快で陽気な回想はその頂点で予期せぬことが起こるが如く突如として転調し、現実に引き戻す。第 1 楽章の悲しみの主題が葬送行進曲となって再び現れ、沈痛な思いを抱えて静かに幕を引く。

山口 亜純

3.弦楽四重奏

C.ドビュッシー／弦楽四重奏曲 ト短調 作品 10 より 第 1.3.4 楽章

Vn. 林 桃子(院 2)

Vn. 北川 乃梨子(院 2)

Va. 有福 佑依(院 2)

Vc. 大友 美侑(賛助)

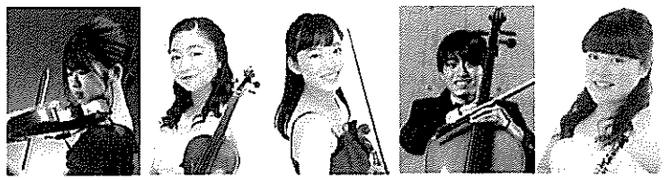
曲目解説

C.ドビュッシー(1862-1918)はフランスの作曲家。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて最も影響力を持った作曲家である。長音階、短音階以外の旋法と、機能的和声に縛られない自由な和声法などを用いて、独自の作曲様式を確立した。彼の音楽は「印象主義音楽」と称されることもある。ドビュッシーが弦楽四重奏曲を作曲したのは、1892 年から翌 93 年にかけてであり、音楽界に革命をもたらし、印象主義の名とともに引き合いに出される《牧神の午後への前奏曲》の初演(1894 年)の直前に書き上げられた作品である。これは、彼が芸術的な円熟期に入ったことを示す最初の作品であった。ドビュッシーは弦楽四重奏において、教会旋法、ジプシー音楽、ジャワのガムラン音楽、マスネやフランクなどの同時代の作曲家の様式など、まったく違った要素をみごとにまとめあげている。さらに、フランク派に特有の循環形式を効果的に用いており、第 1 楽章の第 1 主題をこの曲全体の循環主題として全曲の統一をはかった。初演は、この作品を献呈されたイザイ弦楽四重奏曲によって行われた。初演時、聴衆の大部分は、和声の大胆な新しさにとまどい、この曲の真価は殆ど認められなかったというが、次第に価値が認められ、現在ではドビュッシーの初期を代表する傑作となっている。第 1 楽章はソナタ形式で書かれており、第 1 主題はフリギア旋法で書かれ、全曲を通じてさまざまな形で回帰し、全体の循環主題となる。第 2 主題は夢見るようなやわらかなもので、この 2 つの主題を軸に、ソナタ形式が構成される。第 3 楽章は 3 部形式で書かれ、静かで美しい楽章である。第 4 楽章は、長めの序奏と、3 部からなる主部によって構成される。

林 桃子

4.オーボエ五重奏

A.バックス／オーボエ五重奏曲



Vn. 藤岡 瑞季(院 2)

Vn. 有福 佑依(院 2)

Va. 林 桃子(院 2)

Vc. 橋本 総司(賛助)

Ob. 三輪 桃子(院 2)

曲目解説

アーノルド・バックス(1883-1953)はロンドンに生まれたイギリス人だ。イェイツの詩に感銘を受けアイルランドを訪れ、その風景と神秘的な伝説に魅力された。自身のルーツがアイルランド系であることもあいまって、ロマン主義・印象主義の中にケルトの要素を取り入れた独自の作風を確立した。彼の名声を最初に高めた《ファンドの園》や《ティンタジェル》などの交響詩はアイルランドに霊感を得た作品だ。バックスは、1937 年ナイトに叙され、1942 年「国王の音楽師範」の栄誉を受けたが、晩年は不遇であった。CD 時代になってから、バックスのリヴァイヴァルはめざましいものがあり、7 つの交響曲をはじめ、室内楽に至るまで録音されている。コンサートでは依然として演奏されないため、多くのレコード・リスナーによってバックスは愛聴されているようだ。根っからのロマンティシストで、その音楽は繰返し聴けば聴くほど味が出てくる。バックスは、第1交響曲を完成した直後、1922 年のさいごの 2 カ月間にオーボエ五重奏曲を書いた。交響曲を完成するために苦闘したあとなので、オーボエ五重奏曲はリラックスした気分で作曲された。通常の急-緩-急のパターンによるその 3 つの楽章は、無伴奏のオーボエ・ソロから全くオーケストラ的である豊かな弦の響きに至るまで、印象深いテックスチュアと色彩感の変化を示している。バックスは、オリジナルな旋律や旋律の断片でそのスコアを満たしているが、まるでアイルランド民謡のように聞こえる。それほど深く、彼はアイルランドの文化的環境にのめり込んでいたので、アイルランド的な音調は彼にとって自然に生まれてきたものだろう。こういう特性は、冒頭の小節におけるオーボエの装飾的な渦巻き、第 2 楽章の喚起的な哀哭、フィナーレの生きいきとしたジグなどからも明らかだ。

有福 佑依